

大学生が狙われる

危険のこれから

―リスクリテラシー向上を目指す
活動の展開―

元田 謙太郎 村上 大和 高森 裕子

株式会社三菱総合研究所

はじめに

人は痛みや苦しみを感じて、それを避けるように成長する。同じ経験を繰り返さないために学び、ノウハウを身に付け子どもに伝え、世代を超えて知識が蓄積されていく。しかし、いったん遭遇すると、全てを失ってしまう出来事もある。周りに取り返しがつかない被害を与えてしまう出来事もある。

大学生になるタイミングで、いろいろなことが大きく変わ

る。その機会に、こういった「リスク」について改めて学ぶことが大切ではないだろうか。

1 大学生のリスクリテラシー向上

「大学生になるということは」「社会に出る前の大学生の位置付けとは」等に着目し、大学生になったら遭遇するかもしれない危険な事項を対応策も含めて幅広く分かりやすく紹介したいと考え、書籍化を目指した。様々な紆余曲折を経て、全国大学生生活協同組合連合会（以下、全国大学生協連）と全国大学生協共済生活協同組合連合会（以下、大学生協共済連）と協力して『大学生がダマされる50の危険』を2011年に発刊することができた。

その後10年近くが経過する中、社会も学生生活も大きく変化し、3年ごとの改訂を3回行った。

初版を発刊した際は、インターネットが広く普及し、ワンクリック詐欺やブログ上でのトラブルが多発していて、ネットに関する章に力を入れた。飲酒の問題やアルバイトでのトラブルへの注意喚起も記載した。

発刊直後に東日本大震災が発生し、次の改訂（2014年版）では、自然災害や事故に関する章を新設した。自転

車事故の損害賠償額が極端に増加したことへの注意喚起や、大学生も含めて若い人の自殺が社会問題となっていたこともあり、身体に加えて心の健康についても力を入れた。タイトルも『大学生が狙われる50の危険』（以下、50の危険）に微修正した。

この改訂版発刊時に、今後も定期的に改訂を行おうと考え、そのための最新情報の入手、大学生とのコミュニケーションの維持等も視野に入れて『学生の生活リスク講座』（以下、リスク講座）を開設した。

このリスク講座は、大学生のリスクリテラシー向上を目的として全国大学生協連と大学生協共済連が主催し、リスクコミュニケーションを専門とする放送大学の奈良由美子教授にご協力いただき、継続的に実施している。毎回出席者に対して、大学生生活のリスクと特徴を「図1」のように整理し紹介している。

次の改訂版を発刊したのは2017年。スマートフォンがすっかり普及し、新しい形態のリスクが見られる一方で、災害時の情報活用に役立つことにも触れた。アルバイトに対する注意事項はタイトルをブラックバイトに変え、内容を充実させた。成年年齢引下げに伴う選挙権に関連するリスクも

大学生生活のリスクー特徴と対処

新しいリスクの発生と伝統的リスクの深刻化

- 大学生を取り巻く状況、規範の変化（成年年齢引き下げ、インターネット、経済状態・・・）
- 学生がいろいろな意味で「あてにされている」＝社会・経済システムに組み込まれている（ブラックバイト、悪徳商法、カルト、・・・）
- 「まったなし」のリスク（巨大災害、消費者問題、・・・）
- 被害者にもなるし、加害者にもなる

大学生の認識の問題

- 思い込み（ヒューリスティックによる情報処理、リスク認知バイアス）
「たいしたことにはならない」「自分に限って」「みんなも怖がっていない」
←→「みんなが怖がっている」「なんとなく恐ろしい」
- ひとごと意識「誰かが何とかしてくれる」（主体性の欠如）

対処のポイント

- 自らがリスク管理の主体であるとの意識（じぶんごと化）
- リスクについての様相（実態）を知り、リスク認知の特性を理解し、具体的な対策を知り実行する（可視的で具体的で分かりやすい教材やマニュアルの活用）、疑似体験
- 相談できるひとや機関の存在と協働（関係者の取り組みの必要性）

© Yumiko NARA. All rights reserved. 出典：放送大学教授 奈良由美子「学生の生活リスク講座講演資料」

記載した。読者に、より興味を持ってもらえるようマンガも導入した。（この2017年版は、後ほど紹介する「全国大学生協連 新型コロナウィルス対策特設サイト #Withh コロナ」から、期間限定で無料購読可能）

[図1] 大学生生活のリスクー特徴と対処

2020年の最新改訂版では、奨学金に関する項目や多様性を受け入れることの重要性等と併せて、リスクに対する理解や自分事としてリスクを管理することの大切さを奈良先生に執筆いただいた。

このような活動を通じて、大学生のリスクリテラシーを高め、たとえ危険な場面に遭遇しても、自分の力だけでなく必要に応じて周囲の協力も得ながらその被害を最小限に抑え込み、大学生活を充実させ、社会に羽ばたいていってほしいとの期待を込めた。

2 大学生にとってのコロナ禍

最新改訂版発刊直後に、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが全世界を襲った。

春を彩る卒業式、入学式はおろか、ことごとく屋内外でのイベントが中止され、人々の活動も制限された。この原稿が読まれる頃にどのような状況になっているのか、不安な思いと楽観的に考えたい思いとが入り混じる。

大学生がこの半年近くの間、どのような状況にあり、どのようなことを感じ考えていたのか。全国大学生協連では、学生委員を中心として学び合い・助け合い、仲間と応

援し合うため、「全国大学生協連 新型コロナウイルス対策特設サイト #Withコロナ」を開設し、様々な情報を発信している(URL: <https://www.univcoop.or.jp/covid19/index.html>)。

7月時点のアンケート結果では、アルバイト収入の減少はもとより、たとえアルバイトができて、アルバイトをすることによる新型コロナウイルス感染の不安等が依然として高い。学生支援給付金や奨学金等の救済制度があっても、受給資格のない大学生が多いのも実態である。

また、オンライン授業の導入が新しい試みとして幅広く進められているが、レポート等の提出課題も多く、ビフォーコロナの授業と比べて負担が大幅に増していて、こうした現状を教員が把握できていないとの意見も見られる。上級生は、就職活動はもちろんのこと、進学に関する展望が不透明なままで、卒業後の人生に大きな不安を抱えてもいる。

こうした大学生の窮状や高まる不安がある一方で、世間では「GOTOトラベル」をはじめとする経済活動の活性化策や中小事業者の救済策が打ち出されている。教育現場では、小中学校や高校がいろいろな工夫をして対面での授業を再開している。

そうした動勢の渦中であって、「自分たちが直面しているリスクは社会的に理解されていない」「社会における大学生のリスク軽減の優先順位は極めて低い」と感じている大学生も少なくないのではないだろうか。

3 「変わるチャンス」そして 社会のレジリエンスへ

大学生はもうすぐ自立した大人となって社会に出ていく存在で、高校生までと異なることは事実だが、大学としては、大学生自身がコロナ禍で置き去りにされているような印象を抱かないよう積極的にその声を聴き、共にどうしたら良いかを考えてはどうだろう。

大学の伝統、キャンパスの特徴、地域とのつながりなどが時間をかけて形成されてきた過程で、もちろん創設者による建学の精神があつてのものだが、在籍する大学生自身の存在を忘れる訳にはいかない。大学生の活動の積み重ねがその大学の伝統をつくりあげてきたといっても過言ではないし、受験生が自分が進みたい大学を選ぶ時、そういった各大学の伝統や特徴も大きな要素になっていると考えられるからだ。

翻って、キャンパスに大学生が通うことに大きな制約が伴

うコロナ禍の大学は、この先、何を目指し、どのようになっていくのか。

後期から、少しずつ対面授業を再開する大学も増え、新型コロナウイルスに感染するリスクを抱えながらも対応を検討し、準備しながら先に進んでいくことになる。コロナ禍において研究教育を推進し、大学生のリスク対策を強化していくことは、大学にとってこれまでの大学運営とは別次元で大きな負担が予想される。

しかし、大学生にこのコロナ禍を乗り切る新しい生活様式を体験させることは、将来、この未曾有の危機を乗り越えた多数の大人を生み出すことにつながり、社会のレジリエンスを強めていくことにもなる。

同時にこの取り組みは、大学に対して、各大学がこれまで築き上げてきた伝統やキャンパスの特徴、地域とのつながりを振り返り、何を大切に今後どこを目指していくのかについて、改めて考えるきっかけを与えてくれるようにも思える。

これまでとは異なる新入生を迎え、これまでとは異なる卒業生を送り出していく中で、彼らによってそして彼らと共にどのように大学の伝統や特徴を再構築していくのか、変化する社会や地域の中で大学がどのような姿を描いていくのか、

チャンスでもありピンチでもある状況を迎えている。

コロナ禍における大学生のリスクに真剣に向き合い、共に対策を考え、それを実践できる大学と大学生は、ウィズコロナ、ポストコロナとも呼ばれるこれからの時代にあつて先導的な取り組みを実現できているとも言える。大学生にとつてのリスクは、大学がしなやかに変わっていく機会、レジリエンスを強める契機でもある。

4 大学生に寄り添う取り組みを社会に向けて

50の危険の改訂やリスク講座の実施に際し、私たちは、大学生に寄り添う姿勢を大切にしてきた。

私たち大人は大学などを卒業して社会に出て、社会と共にいろいろな経験を積み、歳を重ねてきているが、大学生は違う。大学生は私たち大人が経験し頭に入れてきたこととは異なる時間を生きており、毎年毎年、新しく大学生になる人もいれば卒業する人もいて、常に入れ替わっていく。だからこそ、その時代の大学生に寄り添い、コミュニケーションを取ることが重要で、必須だと考える。

ビフォーコロナとは異なる学生生活を体験した大学生は、社会全体が変わっていく中で、その先頭に立って、大学時

代の経験を活かし活躍することが期待される。そうした人材を生み出せる大学は、次の時代でも先頭に立つことができるだろう。

奈良先生からのメッセージを紹介する。

「レジリエンスとは、危機や逆境に対して柔軟に適応・回復する力のことを言います。私たち人間はこれまでも、様々なリスクまた危機と共にあり続けてきました。そしてしなやかにそれらを乗り越えてきました。この時、レジリエンスは元々から備わっているものではありません。リスクに向かい合い危機に対処する過程で、獲得し高めていくものです。

防災の分野に『Build Back Better』という概念があります。これは、災害に見舞われた時、単なる復元を目指すのではなく、災害前よりもより強く、より良い仕組みや社会をつくっていくというもので、東日本大震災等の大災害を経験した世界が国際的に共有している考え方です。さらに、やはり重要とされている考え方に『多様な主体による協働』があります。リスクや危機への対応においては、これに関与する全てのステークホルダーをパートナーとして位置付け合うことが必須となります。『してあげる』『してもらう』という関係ではなく、互いのニーズとシーズを出し合っ

て、『対話し、共考し、協働する』という関係をつくることで、当該システムのレジリエンスはより高まっていきます。

今のコロナ禍にあつて、そこからの適応・回復過程にあつても、このような考え方は重要です。そして大学生たちは、Build Back Better を実現する上で、実に心強い、パートナーにふさわしい主体だと考えます。』

5 大学生の力を信じて引き出す取り組みを

大学生にとって大学で講義を受けることは重要なことで、そのために授業料を払っているとも言えるが、図書館や学食で過ごす時間、友達と会う場所、サークル活動やアルバイトに勤しむ機会など、様々な居場所も大切である。コロナ禍に直面している今だからこそ、これらも含めた学生生活全般を大学と大学生が改めて一緒に見つめ直すこと、そして、何よりも大学が大学生とコミュニケーションを取り、共に考え、できることを一緒に進めていくような、大学生に寄り添う姿を大切にしてほしい。

例えば、学年ごとに大学生と直接話をする、あるいは、大学生同士が改めて自分だけではないコロナ禍の中でのお互いの境遇の共通点や相違点、工夫していることを話し合う

など、大学生が自らの言葉で思っていること、感じていることを語り合える場、大学としてそれらを聞いて寄り添える場をつくることも有意義だろう。

地方から入学した大学生、留学生など、多様な大学生が存在する。コロナ禍のもと、自分のことだけで手一杯かもしれないが、大学生自身がそういった多様性を認識し、相手への配慮や思いやりに気付くような機会も貴重だろう。

各大学においても、自らの大学のカラー、特徴、伝統を見つめ直し、この先にどのような姿を描いていくのか、その中で大学生が活躍する場をどのように構築していくのか、大学生が持っている力を信じてそれを引き出すような活動を展開していただきたい。

おわりに

数年後に、50の危険の改訂版を発刊する機会に恵まれることを期待している。その際、今日の前で起こっていることとこれからの展開をその時の大学生にどのように伝え学生生活に役立ててもらおうのか、私たちも常に頭を悩ませながら、そしてリスク講座を継続的に開催しながら、大学生と一緒に検討していきたい。